

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19730367
 研究課題名（和文） 高齢期の過ごし方満足度尺度の開発と高齢者の社会・生産的活動の関連要因の検討
 研究課題名（英文） Development of activities-related satisfaction scale and factors social and productive activities of the elderly
 研究代表者
 岡本 秀明（OKAMOTO HIDEAKI）
 研究者番号：30438923

研究成果の概要（和文）：高齢者の社会活動などの活動参加による主観的な効果（満足度）の把握に主眼を置いた 2 つの尺度、「日頃の活動満足度尺度」と「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」を作成した。この 2 つの尺度を使用し、高齢者の社会活動およびプロダクティブ（生産的）な活動による主観的な効果を検討した。その結果、作成したこれらの尺度は有用であることが示された。社会活動およびプロダクティブな活動の関連要因の活動タイプ別の検討も行った。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop the Activity and Daily Life Satisfaction Scale for the Elderly and Social Activities-Related Daily Life Satisfaction Scale for the elderly, and examined factors associated with social and productive activities for the elderly. The results of the present study suggested that scales had adequate validity and reliability.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	720,000	3,620,000

研究分野：社会福祉学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：高齢者、高齢期、過ごし方、満足度、社会活動、プロダクティブ（生産的）な活動

1. 研究開始当初の背景

わが国では、長期化した高齢期の過ごし方や介護予防の観点から、高齢者の社会活動やプロダクティブ（生産的）な活動が着目されている。

社会活動などの活動による主観的な効果の

把握は、これまで生活満足度尺度などを用いて行われてきた。しかしながら、生活満足度尺度などは、幸福の老いの程度を測定するもので、社会活動の主観的な効果をみるものではない。そのため、生活満足度尺度では社会活動の主観的な効果を敏感かつ詳細に捉えてい

ないといえる。ボランティア活動といった単一の活動ではなく、高齢期における社会活動などの活動による全般的な満足度に焦点をあてて活動による主観的効果を測定する尺度はほとんどみられないのが現状である。したがって、長期化した高齢期の過ごし方が問われ、それに対する支援や環境整備が求められるわが国では、そのような尺度を作成する必要があるといえる。

高齢者の社会活動やプロダクティブな活動に関する研究に関して、これらの活動と生活満足度の関連を検討した研究は多くみられるが、活動の関連要因の研究はそれほど多くない。活動を一括で扱わずに活動タイプ別に関連要因を検討した研究はさらに少ない。社会活動やプロダクティブな活動が着目され、これらの活動参加促進をおこなうためには、より詳細に活動の関連要因を検討する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、以下の3点を実証的に検討することを目的とした。

- (1) 高齢者の社会活動などの活動による主観的効果(満足度)を把握する尺度を作成する。
- (2) 社会活動およびプロダクティブな活動の関連要因を、活動タイプ別に明らかにする。
- (3) 本研究で作成した尺度を用いて、社会活動およびプロダクティブな活動の主観的効果を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 尺度の作成に関して、まず、先行研究により尺度の構成項目案の候補の収集(アイテムプール)を行った。尺度の構成項目案を作成し、予備調査と本調査により検討し、尺度を作成した。尺度の作成過程において、項目の回答分布の確認、検証的因子分析、基準関連妥当性、尺度と理論的に関連があると考えられる活動との関連性、尺度の内の一貫性などを検討した。

(2) 予備調査は、千葉県A市の65~84歳の高齢者600人を対象に郵送調査を実施した。有効回答数329人のうち、代理回答を除外し、主要な項目に欠損値がない296人を分析対象者とした。本調査は、千葉県A市の住民基本台帳から無作為抽出した65~84歳の高齢者1400人を対象に、郵送調査を実施した。有効回答数755人のうち、代理回答を除外し、主要な項目に欠損値がない671人を分析対象者とした。分析対象者の平均年齢は71.5歳、性別は男性が48.3%、女性が51.7%であった。

社会活動およびプロダクティブな活動の

関連要因を検討する際には、本調査によるデータを使用して、各活動タイプを従属変数とし、多変量解析を用いて行った。

社会活動およびプロダクティブな活動の満足度を検討する際には、生活満足度尺度(LSİK)のほか、本研究で作成した満足度尺度も用いて多変量解析により行った。

4. 研究成果

(1) 社会活動などの活動による満足度を把握する尺度は、2つのアプローチにより2つの尺度を作成した。第1のアプローチは、活動による満足感を全体的・総合的に把握するものとした。第2のアプローチは、活動により得られるいくつかの具体的な領域の満足感を主に把握するものとした。

第1のアプローチによる尺度は、「日頃の活動満足度尺度」と名づけた。各項目の回答選択肢は、「とてもよくあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」までの5つとした。尺度の得点化は、得点が高いほど活動による満足度が高くなるように設定した。

最終的に、尺度は「楽しめる活動」「やりがいのある活動」「有意義な自由時間」「興味・関心がもてる活動」の4項目から構成されるものとなった。検証的因子分析により1因子4項目のモデルが支持された。この尺度得点(20点満点;4~20点)と、生活満足度、生きがい感、日頃の充実感、日頃の過ごし方の満足度の4変数との基準関連妥当性、社会活動参加の有無との関係の検討による妥当性も確認された。尺度の信頼性係数(Cronbachの α)は、0.83であった。

第2のアプローチによる尺度は、「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」と名づけた。各項目の回答選択肢は、「とてもよくあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」までの5つとした。尺度の得点化は、得点が高いほど活動による満足度が高くなるように設定した。

尺度案に対して検討を重ねた結果、「学習に関する満足度」「他者・社会への貢献に関する満足度」「健康・体力に関する満足度」「友人に関する満足度」の4因子(4つの下位尺度)14項目という構造となった。

4つの下位尺度の構成項目は次のようになった。学習に関する満足度の構成項目は、役立つことを学ぶ、教養を高める、知的好奇心を満たす、興味あることを学ぶの4項目となった。他者・社会への貢献に関する満足度の構成項目は、社会への貢献、地域への貢献、困っている人の手助け、グループへの貢献の4項目となった。健康・体力に関する満足度

の構成項目は、体力への自信、健康への自信、健康の維持の3項目となった。友人に関する満足度の構成項目は、友人と楽しい時間、友人とのつきあい、一緒に楽しめる友人の3項目となった。

尺度の構造は、検証的因子分析により支持された。基準関連妥当性を検討した結果、尺度全体得点(70点満点;14~70点)および下位尺度得点は、日頃の活動満足度、日頃の生活における充実感、日頃の過ごし方の満足感、生活満足度、抑うつすべての得点と有意な関連を示す結果が得られた。

尺度の下位尺度得点と理論的に関連が想定される活動の有無との関連を検討した。具体的には、「学習に関する満足度」は学習活動の有無、「他者・社会への貢献に関する満足度」はボランティア活動の有無、「健康・体力に関する満足度」は運動との有無、「友人に関する満足度」は趣味の会などの仲間内の活動の有無との関連を検討した。その結果、すべての下位尺度において有意な正の関連、つまり、活動をしていない者よりもしている者のほうが下位尺度の得点が高くなっていた。各因子の信頼性係数(Cronbachの α)は0.814~0.887、尺度全体については0.919という数値が得られた。

以上に示したとおり、本研究で作成した、社会活動などの活動による主観的效果の把握を主眼とした「日頃の活動満足度尺度」と「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」の2つの尺度は、信頼性と妥当性を有することが確認された。

(2) 社会活動およびプロダクティブな活動の関連要因を検討した。活動は、社会活動指標の4つの側面のうち「仕事」を除いた「個人活動」「社会参加・奉仕活動」「学習活動」の3側面と、「同居家族の世話」「家庭外無償労働」の5つとした。個人活動は、近所づきあい、近所での買い物、デパートでの買い物、近くの友人・親戚訪問、遠方の友人・親戚訪問、国内旅行、海外旅行、友人や知人と食事、運動、個人的な娯楽の10項目から構成されるものとし、社会活動指標をもとに2項目(友人や知人と食事、個人的な娯楽)を変更して用いた。社会参加・奉仕活動は、地域行事、町内会・自治会、老人クラブ、趣味の会、ボランティア、伝承活動の6項目から構成されるものとした。学習活動は、高齢者向け大学・教室、カルチャーセンター、市民講座・講演会、シルバー人材センターの4項目から構成されるものとした。同居家族の世話は、同居家族への世話(看病・介護・孫の世話)の1項目とした。家庭外無償労働は、別居親族への手助け(家事・手伝い・看病・介護・孫や乳幼児の世話)、友人・近隣への手助け(家事・手伝い・看病・介護・乳幼児の世話)

ボランティアの3項目とした。

社会活動とプロダクティブな活動の概念は重なる部分があるため、本研究では、ボランティアの項目が双方の活動の項目に用いた。プロダクティブな活動には、家事や仕事が含まれることが多い。しかしながら、家事は多くの高齢者が行っていること、仕事から引退後の高齢期の過ごし方に本研究は焦点をあてたことにより、本研究では家事と仕事を除外して分析を行った。

活動はそれぞれ、活動高位群=1、活動低位群=0として従属変数とし、二項ロジスティック回帰分析を行った。独立変数は、年齢、性別、IADL、暮らし向き、親しい友人・仲間の数、活動情報認知状況とした。

分析の結果は以下のとおりとなった。個人活動に関連する要因は、年齢が低い、IADLが自立、親しい友人・仲間の数が多い、活動情報認知状況が良好な者であった。

社会参加・奉仕活動に関連する要因は、IADLが自立、親しい友人・仲間の数が多い、活動情報認知状況が良好な者であった。

学習活動に関連する要因は、女性、親しい友人・仲間の数が多い、活動情報認知状況が良好な者であった。

同居家族の世話に関連する要因は、女性、暮らし向きが良好である者であった。

家庭外無償労働に関連する要因は、年齢が低い、女性、IADLが自立、活動情報認知状況が良好な者であった。

以上の結果から、特に、社会活動については、親しい友人や仲間という社会関係が重要な要因となっていること、活動情報を効果的に周知して活動情報認知状況を高めることが求められることが示された。プロダクティブな活動については、男性よりも女性のほうが活動に関与している状況が示された。

(3) 社会活動およびプロダクティブな活動による主観的效果を重回帰分析により検討した。活動は、社会活動指標の「個人活動」「社会参加・奉仕活動」「学習活動」の3側面と、「同居家族の世話」「家庭外無償労働」の5つとし、独立変数とした。従属変数は、「日頃の活動満足度尺度」「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」の4つの下位尺度、生活満足度尺度K(LSIK)を用いた。コントロール変数は、年齢、性別、暮らし向き、IADLを投入した。

分析の結果、個人活動は、すべての従属変数と有意な正の関連がみられた。社会参加・奉仕活動も、すべての従属変数と有意な正の関連がみられた。学習活動は、LSIK以外のすべての従属変数と有意な正の関連がみられた。同居家族の世話は、社会活動に関連する過ごし方満足度尺度の下位尺度である「他者・社会への貢献に関する満足度」のみと有

意な正の関連がみられた。家庭外無償労働は、LSIK 以外のすべての従属変数と有意な正の関連がみられた。

従属変数別にもた場合、生活満足度は、個人活動、社会参加・奉仕活動の2つの活動に有意な正の関連を示した ($r = 0.233 \sim 0.109$)。日頃の活動満足度尺度は、同居家族の世話以外の活動すべてに有意な正の関連を示した ($r = 0.434 \sim 0.186$)。社会活動に関連する過ごし方満足度尺度の4つの下位尺度に関して、他者・社会への貢献に関する満足度は、すべての活動と有意な正の関連を示していた ($r = 0.584 \sim 0.152$)。学習に関する満足度 ($r = 0.383 \sim 0.109$)、健康・体力に関する満足度 ($r = 0.425 \sim 0.125$)、友人に関する満足度 ($r = 0.584 \sim 0.152$) の3つの下位尺度は、同居家族の世話以外の活動すべてに有意な正の関連を示した ($r = 0.434 \sim 0.186$)。

以上の結果にみられるように、本研究で作成した2つの尺度は、これまで社会活動の主観的効果の検討の際によく使用されてきた生活満足度と比較して、社会活動などの活動との関係がみられやすく、かつ関係性の強さを示す r の値も大きくなっていった。したがって、本研究で作成した「日頃の活動満足度尺度」と「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」の2つの尺度は、社会活動などの活動による主観的な効果を把握する際に、非常に有用な尺度であることが示された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

岡本秀明、高齢者向けの「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」の開発と信頼性・妥当性の検討、日本公衆衛生雑誌、査読有、2010、印刷中

岡本秀明、市川市における高齢者の活動と心理的 well-being の関連、和洋女子大学紀要、査読有、50集、2010、41 - 53

岡本秀明、高齢者の活動に着目した日頃の活動満足度尺度の作成、社会福祉学、査読有、50(2)、2009、45 - 55

[学会発表](計5件)

岡本秀明、地域高齢者の社会活動およびボランティア活動に関連する要因(サテライトシンポジウム4「社会を支える高齢者の能力と役割」)、第68回日本公衆衛生学会総会、2009年10月22日、奈良県文化会館

岡本秀明、高齢者のプロダクティブな活動

と日頃の活動満足度の関連の検討、第68回日本公衆衛生学会総会、2009年10月21日、奈良県文化会館

岡本秀明、高齢者の社会活動および学習活動と心理的 well-being の関連：日頃の活動満足度尺度の特性に焦点をあてて、日本社会福祉学会第57回全国大会、2009年10月11日、法政大学多摩キャンパス

岡本秀明、高齢者の社会活動の満足度を測定する項目の予備的検討、日本老年社会科学会第51回大会、2009年6月19日、パシフィコ横浜

岡本秀明、高齢期における過ごし方満足度の測定の試み：測定項目の設定および活動との関連の検討、日本社会福祉学会第56回全国大会、2008年10月12日、岡山県立大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

岡本 秀明 (OKAMOTO HIDEAKI)
和洋女子大学・生活科学系・准教授
研究者番号：30438923

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：